

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

8月の家族たち

2013年・アメリカ映画
配給/アスミック・エース・121分

2014 (平成26) 年3月5日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督：ジョン・ウェルズ
原作・脚本：トレイシー・レッツ
製作：ジョージ・クルーニー
出演：メリル・ストリープ/ジュリア・ロバーツ/ユアン・マクレガー/クリス・クーパー/アビゲイル・ブレスリン/ベネディクト・カンバーバッチ/ジュリエット・ルイス/マーゴ・マーティンデイル/ダモット・マローニー

👁️👁️ みどころ

夫婦とは？親子とは？兄弟・姉妹とは？コトが起きる中で次々と露呈してくる、そんな「家族の物語」は人間味タップリだが、生々しくかつ奥が深い。

父の死亡を契機として、真夏の盛り、オクラホマの片田舎に集まったウェストン家ご一同の「会話劇」に見る家族の物語は、まさにこれぞ映画！互いにここまでさらけ出し、ここまでぶつけ合えば、家族は互いに許せる？いやいや、それすらも、なかなか・・・。



■□■これぞ、まさに家族の物語！■□■

「家族」は普通、夫婦、親子、兄弟、姉妹から成り立っている。また、家族に関する法律としては親族法と相続法があり、これが親族、相続に関する（法的）争いを裁くための法律（道具）になっている。しかし、「離婚」調停の段階になれば法的紛争だから裁判所が関与するが、それ以前の「夫婦ゲンカ」は法律問題ではない。また、遺産争いも、調停申立の手続がなされるまでは単なる相続人間の「モメ事」だから、家庭裁判所が関与することはない。

しかし、『8月の家族たち』と題された本作を観ると、冒頭、オクラホマ州オーセイジ郡のウェストン家で家政婦兼看護士として住み込みで働くことになったインディアン（ネイティブ・アメリカン）の女性ジョナ（ミスティ・アップラム）と面談していた年老いた男、ベバリー・ウェストン（サム・シェパード）の「失踪」（＝「死亡」）を契機として、その妻バイオレット・ウェストン（メリル・ストリープ）を中心とする夫婦、親子、姉妹の間に、いかに波風が立ってくるのかがよくわかる。また、その波風（＝争い）の中でこそ見えてくる、人間の「本性」が否応なく浮かび上がってくる。私の後輩で、弁護士になれば

離婚をはじめとする親族、相続問題のドロドロした事件をやりたくて常々言っていた若手の女性弁護士がいたが、彼女なら本作のような映画が大好きなはずだ。もっとも、私は、大学時代にはよく恋愛の悩み相談を聞いていたが、弁護士になってからはその手の相談を聞くのは少し面倒になっている。

本作は、トニー賞（最優秀作品賞他）とピュリッツァー賞（ドラマ部門）をW受賞したトレイシー・レッツの戯曲『August: Osage County（8月の家族たち）』（07年）を映画化したものだが、本作の中で描かれる家族とは？夫婦、親子、姉妹とは？という問題提起は生々しく、かつ奥が深い。これぞ、まさに家族の物語！

■□■本作も「三姉妹もの」！■□■

去る2月25日に観た『早熟のアイオワ』（08年）は、『世界にひとつのプレイバック』（12年）『シネマルーム30』（30頁参照）や『ハンガーゲーム2』（13年）等で、今や引っ張りだこの若手No.1女優となったジェニファー・ローレンスと、『キック・アス』（10年）で大ブレイクした若手女優クロエ・グレース・モレッツという2人の女優が幼い姉妹役で出演した貴重な映画だが、実はこれは幼い「三姉妹モノ」だった。有名な「三姉妹」としては『宋家の三姉妹』（97年）における、富を愛した長女・霏齡、国を愛した次女・慶齡、権力を愛した三女・美齡（『シネマルーム5』（170頁参照）や、浅井長政とお市の方との間に生まれた三姉妹、豊臣秀吉の側室・茶々、京極高次の正室・初、徳川秀忠の継室・江がいるが、『三姉妹～雲南の子（三姉妹/Three Sisters）』（12年）（『シネマルーム30』（184頁参照））のような、誰も知らない悲惨な三姉妹もいる。しかして、実は本作にも、長女バーバラ（ジュリア・ロバーツ）、次女アイビー（ジュリアン・ニコルソン）、三女カレン（ジュリエット・ルイス）の三姉妹が登場する。

霏齡、慶齡、美齡という「宋家の三姉妹」も、茶々、初、江という浅井家の三姉妹も「性格」はそれぞれ大きく違っていたが、それは本作も同じ。また、淀、初、江の三姉妹の中では長女・淀の「仕切り屋タイプ」が目立っていたが、それも本作は同じだ。口の中のできたガンの治療のため何種類もの薬に頼っているうえ、認知症の初期症状も出ているものの、生来の（？）毒舌家で、口だけはとにかく達者な母親バイオレットに「対抗」できるのは、しっかり者の長女バーバラだけらしい。本作は第86回アカデミー賞の主演女優賞と助演女優賞にノミネートされたメルル・ストリープとジュリア・ロバーツの「言い争い」を軸としてストーリーが展開してくから、他人様の争いゴトにはできるだけタッチしたくない人にはお勧めできない。逆に、先ほど紹介した私の後輩の女性弁護士のような、家族のトラブル大好き人間（？）は、これぞ必見！

■□■三姉妹それぞれに問題あり！すると大家族では・・・■□■

冒頭に見る限り、ベバリーとバイオレットの間にはこれといった夫婦間のモメ事はなく、また、ベバリーにはこれといった自殺の要因もなかった。しかるに、ウェストン家を訪れた保安官から、湖でベバリーの遺体が発見されたと聞かされたから、さあ大変だ。ベバリーが失踪したと聞き、バーバラは既に夫のビル（ユアン・マクレガー）、一人娘のジーン（ア

ビゲイル・ブレスリン) と共にコロラドから実家に戻っていたが、保安官からの報告を聞き唾然。ところが、そんなバーバラの傍らで、パイオレットは突然レコードをかけ奇妙なダンスを踊り始めたから、アレレ……。この家族は一体どうなっているの？

バーバラは浮気したビルと別居中であるうえ、14歳で反抗期の娘に手を焼いていることが以降の会話の中で少しずつ見えてくるが、問題を抱えているのは他の2人も同じ。父親の「葬儀」のために、フロリダに住む三女のカレンも婚約者のスティーブ(ダーモット・マローニー) とともに戻ってきたが、この婚約関係もどこか怪しそうだ。また、実家と疎遠になっているバーバラやカレンと違い、一人だけ地元に残って、両親の面倒を見ていた次女のアイビーは、男に全く縁がなさそう。しかし、ストーリーが展開していくにつれて、実はアイビーにも……。

さらに、葬儀にはパイオレットの陽気な妹マティ・フェイ(マーゴ・マーティンデイル) とその夫チャールズ(クリス・クーパー) も出席したが、その一人息子のリトル・チャールズ(ベネディクト・カンバーバッチ) は「寝坊した」という理由で欠席。この男は独身だが、いい年をして「寝坊で葬儀に欠席」とは一体ナニ? このように、三姉妹それぞれに問題あり!すると大家族では……。

■□■こんな家族の「会食」は最悪!しかし、これぞ映画!■□■

一般的に葬儀は悲しいものだが、葬儀には親族の面々が一堂に会することになるから、そこでの会食は久しぶりの近況報告の場になることが多く、それなりに楽しいもの。また、西欧諸国では、自分の家に友人・知人を招いてのホームパーティーの経験が多いから、そこでいかにウィットに富んだ会話をくり広げることができるかが「大人の魅力」の見せ所になる。

リチャード・リンクレイター監督の『ビフォア・ミッドナイト』(13年)は、インテリジェンスの高い夫と妻が恋愛、セックス、夫婦、人生、文学について関わせる「会話劇」が魅力の映画だったが、ずっとしゃべりっぱなしの映画を見るのは一面ではしんどかった(『シネマルーム32』未掲載分)。本作もそれと同じような「会話劇」の面白さとしんどさがあるが、2人だけの「会話劇」だった『ビフォア・ミッドナイト』に比べると、本作はキャラの強い登場人物がそれぞれに自分の主張を展開するので、その会話(議論?)は面白い。

しかし、本作中盤最大の見せ所となる、長い食卓を挟んだ親せき一同の「会食」における会話は最悪だ。パイオレットが「毒舌家」であることはよくわかるが、料理の話題はもちろん、誰がどんな話題を提供してもそれに対してことごとく嫌味を言われ、攻撃され、場を白けさせられれば、誰も彼もいい加減ウンザリ!最後には、あくまで優しいチャールズもキレてしまったうえ、パイオレットとバーバラによる母娘の「つかみ合いのケンカ」にまで発展!まさにこれぞ映画!という、そんな親せき一同そろった食卓での辛辣な会話劇に注目!

■□■ 自宅？施設へ？主導する長女には更なる難問が！ ■□■

メルリ・ストリープのセリフ回しはどの映画を観ても迫力があるが、この家族の「会食」でバイオレットが見せるあまりの毒舌や、誰もが触れたがらない話題へ平気で踏み込む無神経さは、どうも薬の飲み過ぎからきているらしい。取っ組み合いのケンカまで展開しながら、まだそれくらいの優しい気持ち(?)を残していたバーバラは、家の中を隅から隅まで家捜しし、バイオレットが隠し持っていた薬を洗いざらい回収し、破棄してしまうことを親せき一同に指示。泣き叫ぶバイオレットを尻目にそれを断行したから立派なものだ。さらに、これによってさすがに少しおとなしくなったバイオレットを施設に連れて行き、自分で薬をコントロールできないようであればここに入れる、と脅したから、さすがのバイオレットも白旗を・・・。

他方、バイオレットとのそんな「対決」にかかりきりだったバーバラを尻目に、何かと反抗的な一人娘のジーンはある夜、ステーブからもらったハッピーを吸いながら2人で何やら怪しげな雰囲気にな・・・。このままコトが進めば、変なことになるのでは・・・。自分の夫の浮気問題に加えて、母親への対処方法に頭を悩ませていたバーバラには、更なる難問が・・・。さらに、婚約者であるステーブが姉の娘に対してチョッカイを出している(?)ことを知った、三女カレンの対応は？



『8月の家族たち』

Copyright © 2013 AUGUST OC FILMS, INC. All Rights Reserved.
4月18日(金) 大阪ステーションシネマほかロードショー

■□■いとこ同士の恋の行方は？しかし、真実はもっと深刻！■□■

8月の暑いオクラホマ州の片田舎を舞台として「家族の物語」を会話形式で描く本作は、クライマックスに向けて、それまで男つ気の無かったアイビーを軸として、あつと驚く新たな展開を見せていく。あの「会食」の場で、リトル・チャールズが突如立ち上がり、「ここで皆さんに報告しておきたいことがある」と切り出したから、一同は一斉に注目！それを目で密かに制していたのがアイビーだったが、ジョン・ウェルズ監督はこの時点でこの2人が恋仲になっていることを私たち観客には教えてくれるからそのストーリー展開はわかりやすい。しかし、アイビーとリトル・チャールズはいとこ同士だから、そんな2人の恋はヤバイのでは・・・。

親せき一同の中で、この事実を最初に知ったのはバーバラだ。当然バーバラはそれは許されないことだと反対したが、アイビーは「子供を作るわけではないから」と反論。しかし、コトはそういう問題ではないはずだ。さらに、ある状況下でバーバラからこの話を聞いたマティ・フェイは、何が何でも2人のニューヨーク行きを阻止するようバーバラに厳命！「なぜそんなに？」とのバーバラの質問に対して、マティ・フェイの口からは「リトル・チャールズは夫チャールズとの間の子供ではなく、亡ベバリーとの間に生まれた子供である」との驚くべき告白が飛び出したから、バーバラはもちろん、私たちもビックリ！異母姉弟にあたるアイビーとリトル・チャールズが恋仲になることなど許されるはずがないのは当然だが、そんな深刻な事実をアイビーが知ったら・・・？さあ、ここまでくると、本作が描く家族の物語はトコトン深刻に。互いにここまでさらけ出し、ここまでぶつけ合えば、家族は互いに許せる？いやいや、それすらも、なかなか・・・。

2014（平成26）年3月10日記

最高裁の新判例が家族制度に与える影響は？

1) 昨年9月、最高裁判所は結婚していない男女の間の非嫡出子（婚外子）の遺産相続分を嫡出子の半分にすると定めた民法の規定は、法の下での平等を定めた憲法に違反するとする初判断を示した。

2) 同判決に対しては、昔ながらの家族制度の維持が大切だと考える自民党の保守派が一斉に猛反発。①判決は世間の常識と離れている②正妻の子と愛人の子を同等にしているのか③保守政党として家族を重視する姿勢を打ち出すべきだ、等の発言が相次いだ。

3) もっとも、14人全員の裁判官の一致で違憲と断じられた以上、国会は改正せざるをえない。そこで、昨年12月5日嫡出でない子の相続分を嫡出子の相続分と同等にする旨の改正がされたが、戸籍法の改正は見送られた。

4) フランスでは既に法律婚より事実婚のほうが多いし、連れ子を持った親同士の再婚もざら。昨年5月には欧州9番目の同性婚容認国になった。旧来の家族制度も大切だが、日本は何と遅れた国？

2014（平成26）年5月7日記